

ラスト・ダンジョン

目次

指輪物語	293
ふたりの休日	271
ラスト・ダンジョン	5

ラスト・ダンジョン

子供の頃から、かなりの「うっかり者」と言われ続けてきた。

本人は、いたって真面目にやっているつもりなのに、周りからは隙だらけに見えるらしい。そんな私は、今窮地に立たされていた。絶体絶命とは、まさにこのことね。

「ちよ、ちよっと待ってくださいよ〜っ！」

……あ、やば。周囲の視線が私に集まってるじゃない。

駅前に店舗を構えた不動産屋。最高の立地条件にふさわしく、そう広くない店内には、従業員と客を合わせてざっと十人くらいの人間がいた。月半ばの日曜日としては、まずまずの賑わいかな？ 「そんな風に言い切らないで、もっと丁寧を探してみてくださいませんか？ 私、本当に困ってるんです」 カウンター越しに対応してくれているのは、紺色の腕カバーを着けたおじさん。この人、人あたりはいいんだけど、なんか頼りないんだよね。

「そうは言われてもねえ、お姉さん。どんなに頑張ったところで、あなたのご希望にあった物件なんて絶対見つかりませんよ。ほら、去年この路線に都心から地下鉄が乗り入れるようになったで

しょう。それで一気に地価が上がってしまっただけです」

一応、調べてみてはくれるのかな。目の前のパソコンを操作して、出てきた画面をこちらに向けてくる。

「ほら、ご覧なさい。ざっとこんなものです」

ずらりと物件が並んだ一覧表。そこにあったのは、私が出した希望に見合ったものばかりだった。そしてその家賃は――

「え、こんなにするんですか！」

うっそ〜！ 考えていたよりも二万円以上高いじゃないっ、信じられない。それでも今のアパートよりも駅を三つ分下ったんだよ？ んで、この値段はないわ。

「じ、じゃあ……ええと、あと五分くらい。そうです、駅から徒歩二十分のところまで範囲を広げてください！ そうしたら、あるいは」

「いや、それはお勧めできません」

それまで「わかったでしょう？」って顔で私を見ていたおじさんは、あからさまに顔を曇らせた。「この辺りは夜になると人通りが極端に少ないし、物騒な事件もちらほらありますしねー。正直なところ駅から十分、それも明るい大通り沿いじゃなければご紹介したくないですね」

うわ、駄目出しされちゃいましたか。どうにか今日中に即入居可能な物件を見つけようと朝から頑張ってきたのに、ここでも無理ってこと？ 一体これ以上、どうしろというのよっ。

でも諦めちゃ駄目、せっかく掴んだこのチャンスをフイにすることはできない。ギリギリ目いっ

はい、背水の陣なんだから。

「そ、そうですか。……でも」

もうちよつとだけ、無理を通してみようかな。そう思って今一度、口を開きかけたとき。ふつと背後に人の気配を感じた。

「――失礼。話の途中だけど、ちよつといいかな？」

いつの間にか私の真横まで進んでいたその人は、ぱりつとしたスーツ姿の見るからに「できる男」風。こういうのって、言葉にして説明するのは難しいのね。だって、ようするに雰囲気でしょう？ 背も、思わず見上げちゃうくらいに高い。私の座っている椅子は足が床に付かないくらい高めなんだけど、それでも「え？」って驚いちゃうほどなの。

「あ、これは吉田様。お待たせして申し訳ありません！――おい、木村くん！ まだ第五ビルの資料は揃わないのかい？」

おじさん、いきなりの低姿勢。と言うことは、もしかしてこの人は、お得意様？ だからといって、こうして割り込んできていいってことはないと思うんだけど。

「いや構わないよ、ゆつくりやつてもらって。それより、僕は今、こちらの女性に折り入って話があるんだ」

柔らかい物腰で大人の対応、そこまではまずまずの合格点だと思った。ふうん、ルックスもなかなか。こういう人って、社内でもモテモテだったりするんだよね。

……なんて考えてたら。え、私に……？

「は？」

どういうこと、訳わからない。椅子に座ったままで見上げる私に、彼は余裕の微笑みで答える。「とりあえず、あつちに場所を移そう。大丈夫、そんなに長くは時間を取らせないよ」

そして案内されたのは、窓際の接客スペース。

つい立てで仕切られたその場所は、ちよつとした秘密基地みたいだ。応接セットも高級そうで、座り心地も満点。きつとここは上客用の場所なのね。

「すまないね、いきなり」

席に着くやいなや、薰り高いコーヒーが運ばれてくるのにもびつくり。へえー、インスタントじゃないんだな。私には出がらしのお茶だったのに、なんたる対応の違いなの。

「いえ、それより話ってなんでしよう？ 申し訳ありませんが、私とても急いでるんです」

ここで断られちゃったら、また次の店を探さなくちゃ。仕事は明日から始まるんだし、一刻の猶ゆづ予も許されていないのよ。

「そうみたいだね。先程からの話によれば、かなり困っている様子だけど」

あ、やつぱり聞こえてました？ まあ仕方ないか、私って元々声が大きいし。気をつけてはいるんだけどね、頭に血が上ると、ついついそのことを忘れてしまうみたい。

「ええ、まあ――」

別に通りすがりのこの人に、事細かに説明することもないとは思うけど、今の私は途方に暮れた

状態で誰かに愚痴つてしまいたかったのも事実。だから、かいつまんで説明した。

三ヶ月前、それまで勤めていた会社が突然の倒産。退職金もほとんど出ないまま放り出された。それからは必死のハローワーク通い。でもこの不況下で、一般事務を一年ちよつと経験しただけのペーペーに簡単に次の仕事が見つかるわけもない。

だけど必死に頑張った、派遣会社に登録して、そこが開催するパソコンの講習を片っ端から受けて。そしたらようやく先週「経験が浅いから見習い期間を設けるけど、それで良かったら」っていう条件付きの採用をもらったのね。

やっと一息つけると思ったら、今度はアパートの大家さんからもない通達が。なんと来週にもここ一帯の取り壊しが始まるから立ち退けつて言うじやない。なんなのそれ、いきなりすぎるでしょ！ 法律的に問題あるんじゃないですか？ そう言つたところで、向こうは「決まったものは仕方ない」の一点張りなの。

ただですら、不安定な採用条件。その上、住むところもないとなると、その場で「採用取り消し」になつちやいそう。だから、どうにか新しく借りる部屋を見つけなくちゃならない。

「まあ、実家の両親からは『早く戻つてこい』つて言われてますし、いざとなればそうするしかないと思つてます。でも、安易な方向に流されるのつてやっぱり嫌なんですわね。私、自活したいんです」  
やっぱり都会にいくとちやできないことつていっぱいあるでしょう。両親の庇護の下でぬくぬくと生きるの楽でも、いちいち干渉されたり行動を制限されたりするのは面倒だ。

「ふうん、見かけによらずしっかりしているんだね」

にこやかな表情のままですう告げた目の前の男は、私を意味ありげに見つめた。

ええと、……なんて言うのかな。品定めをされてるつて、こんな感じ？ 頭のとっぺんからつま先まで、スキャンされてる気分。

「……あの……」

なんか失礼なこと言われてるし、それにぶしつけな眼差しも気に入らないし。そりゃ、通りすがりの私の話を黙つて聞いてくれたのには感謝する。だけど、それとこれとは話が別。

「あ、ちよつと待つて」  
私が話を切り上げて立ち上がろうとしたのに気づいたらしい。彼はこちらの行動を押しとどめるように手のひらで制する。そして、おもむろにこう言つた。

「いい話があるんだ、聞いてくれるかな？」

すごく楽しそうに話すのね、またとない名案を思いついたみたいに。「なんなの、この人」つて眼差しを返す間もなく、その唇はさらに信じられないことをのたまつた。

「君が望む物件をすぐに用意する、ただし夫付きで」

それから約二時間後。つるべ落としの秋の日はとつぷりと暮れ、辺りはすっかり闇の中。ここは都内の集合住宅。明かりの灯る窓が家族の帰りを待つている。

「えー、なにそれ。お姉ちゃん、ホント笑える〜っ！」

生後三ヶ月の赤ん坊を抱いたまま、大うけにうけてるのが妹の花実。ちなみに私の名前は若菜梨

実、二十四歳で、ただいま彼氏募集中。

「で、……で？ 相手はどんな人なの、教えて教えて！」

ノリノリに身を乗り出して、きらきらの瞳で見つめながら聞いてくる。我が妹ながら、なんてストリートな感情表現。裏表のないこんな性格が誰にでも好かれる要因なんだろう、本当に羨ましいわ。母親が嬉しそうにしているからかな、膝の上の赤ん坊もきゅきゅとしゃべり声を上げてる。

その向こうではTVのお子様番組を見ながら激しく踊り続ける三歳児。ここは相変わらず賑やかだ。「知らない、そんなの。だって、なにも聞かなかったもの」

あー、面倒くさい。前振りになるかなって思っただけ、こんな話するんじゃないか。そのあとのやりとりの煩わしさを最初に考えるべきだったな。

「えー、そんな訳ないでしょう？ 名前とか勤め先とか、最低限の情報くらいはくれたはずよ。しばらくくれないかって、いいじゃない」

そう言いながら、妹は私が駅前のショップで買ったお持たせのケーキを口に運ぶ。母乳で育てているから、ふたり分の栄養が必要だっていうのが口癖。でもさすがに、ちよつとふくよかになりすぎているんじゃないかなあ。はつきり指摘したら落ち込みそうだから言わないけど。

「知らないってば、知らないの」

もちろんあのあと、「ばつかじゃなの!?」って怒鳴りつけて会話は終了。ちよつとばつかイ男だったからって、話を聞いてやってもいいかと思っただけの間違いだった。

吐き捨てるように答えながら、私もケーキを一口。洋酒を効かせた逸品だけど、ゆっくり味わう

気分じゃないのが残念だ。きつと今は、なにを食べても砂を嚙んでいるように味気ないと思う。ただですら明日の初出勤がプレッシャーになっているのに、どうして災難ばつかに降りかかるのかな。

「もう、意地悪なんだからあー！」

まったく、どうしたらそういう結論になるのやら。本当に幸せボケをしている人はいいわね。もうじき最愛の旦那様も日曜出勤から戻ってくるんですよ。ああ、身内にあてつけられるなんて最低。

今だって目の前の彼女は、ふつくらした輪郭にふわふわの髪で「愛されています」オーラを力いっぱい放出してる。それに引き替え、ちよつと手入れを怠るだけで貧相に見えてしまう私。朝念入りにセットした髪も、今は見る影もなくしぼんでいる。綺麗なストリートと言えれば聞こえは良いけど、とにかくボリュームが足りないの。顎も尖って気が強そうに見えるじゃないか。

「あのね、こっちはそれどころじゃないの。待望の新作ゲームをいそいそとプレイし始めたら、まだ序盤なのに、いきなり最終章に出てくるようなボスクラスのモンスターが次々襲いかかってきてるって状況なんだから」

私はなんて可哀想なんだろう。突然のリストラも難航する再就職活動も、そしてアパートの取り壊しも、そのひとつひとつは「仕方ない」と諦められることではあるんだけど、なにも全部がいつべんにやって来なくてもいいと思うんだよね。

でもって、駄目押しはさっきの男。本当に人を馬鹿にするにも程があるって感じ。

「……そういうえば、お姉ちゃんは昔からロールプレイングゲームが大好きだったよね。それって、

普通の人には通じにくい説明だと思うよ」

あれ、そんなに例えが変だったかな。でも、今の自分の身の上を的確に表現するには、この上ない説明だったと思うんだけど。

「いいじゃない、そんなの。もうこの話題はおしまい！」

駄目だ、気がつくと話が脱線していく。そうよ、今夜ここに来た最初の目的を思い出さなくては。「それよりさ、本題をよろしく。いいでしょ、しばらくの間この住所を貸してよ。間借りしていることにすれば、どうにかなるって。その間に新しい部屋を探すから」

こうなったら、姉の強さで押し切る。とりあえず、現住所を確保しないと話が始まらない。今のアパート、取り壊しはもう間近。一刻の猶予ゆうよも許されない感じなんだから。

ここに頼むのはまずいと最後の最後まで我慢した。だけど、あの失礼すぎる迷惑男のせいで部屋探しを続行する気力もなくなってしまい、今日のところはこの辺で手を打つほかなくなった。結局は身内にしか頼れないってのが情けない。

「え、絶対に無理！ 親子四人でもキツキツなのに、お姉ちゃんまで住めるわけないよ。ゴメン、悪いけどほかを当たって。もしも抜き打ちで調査とか入ってばれちゃったら大変でしょう、卓弥たけやさんに迷惑はかけられないわ」

あ、「卓弥さん」っていうのは妹のどんな様の名前。外交官試験に一発合格したエリートで、外務省に勤めてる。ということは、この部屋は官舎なのね。多少手狭でも都内の部屋にしては破格の家賃だって聞いている。

「そんなこと言わないでよ、今まであんたのために私がどれだけ骨を折ってきたのか忘れたの？ 私がいなかったら、今の生活だってなかったんだからね。その辺、忘れないで欲しいんだけど」

私だって、できればこんな言い方したくはない。でも、今は綺麗事を言っている場合ではないの。「この住所を書いたって、普通は官舎だなんて気づかないって。当座のことよ、どうか助けて！ なんなら、私から卓弥さんに頭を下げてもいいからさ」

なりふり構わずごり押しする私、こうなっちゃうと見栄もなにもなくなってしまう。「うーん、……そう言われると困っちゃうなあ……」

大した手入れをしなくても綺麗に整ってる眉をひそめて、花実は大きくため息をついた。

人生の途中まではエリート街道をひた走っていたはずの妹なのに、その見た目はどこまでもほんとしてる。とびきり若いママだけど、この性格だからいわゆる公園デビューも順調で、近所のママさん軍団にも母子共に可愛がられているんだとか。

「じゃあ、ホント。すぐに新しい部屋を見つけてね、お願いよ」  
はいはいはい、わかってますって。

ようやく肩の荷が下りて、いきなりケーキが美味しくなる。余計に買ってきたもうひとつも有り難くごちそうになって、気分上々。あれ、もしかしてケーキに仕込まれた洋酒がまわっている？

まあ、それでもいいか。  
千鳥足になりながらも、かろうじて取り壊し寸前の部屋に戻った私。とりあえず目の前の心配事がなくなったことにホッとして、そのまま夢も見ずにぐっすり寝入っていた。

翌日、派遣会社の社員に付き添われて向かった新天地で私を出迎えたのは、どこかで見覚えのある顔だった。

「え、そういうことだから。あとのことはこちらの平野ひらのさんに聞いて。彼女はベテランだからとても頼りになるよ」

右の頬に縦三つ並んだ個性的なほくろに記憶を巡らせてビンゴ。最終面接で、これでもかかってくられてんこ盛りに嫌みを言ってくれたおじさんだ。

「本当に仕事する気あるの？」とか「いい加減な気持ちで来られちゃ迷惑なんだよね」とか、とにかくいちいち引つかかる言葉の嵐。もしかしてこの人って、私に採用を辞退させるために送り込まれた秘密兵器なのかなって本気で思ったくらいよ。

「はい、ありがとうございます」

なにが「そういうこと」なのかもよくわかってない。だいたい通路を歩きながらもエレベーターの中でもほとんど無言だったし、いつになったら話を切り出されるのかとヤキモキしちゃった。

「じゃ、頼んだよ。平野女士」

頼りになりそうもないおじさん——もとい営業部二課・田たの之倉くら課長、直々にご指名を受けたのは、

私よりもいくらかお姉様な方。

後ろでひとつにまとめた髪は、おろしたら結構長いんじゃないかな？ 今は制服姿で地味な印象だけど、こういう人は私服に着替えると別人になることが多いような。きりっとした目つきは横長フレームのメガネに縁取られてる。

彼女は課長が「ベテラン」という単語を口にした途端、誰にでもわかるような怒りの表情に変わっていた。そばで見えていた私ですらハラハラする程だったのに、失言した当の本人がまったく気づいていないんだから、困っちゃう。きつとこの課長は元々がそういうキャラなんだ。

「平野です、平野あやこ子。どうぞよろしく。ええとあなたは若菜——」

あ、想像したよりもハスキーな声。固まっていた表情が少しほぐれると、がらりと印象が変わる。「あ、若菜梨実です。こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」

先輩から先に名乗られてしまい、慌ててこちらも自己紹介。いつもながら私のファーストネームって舌を噛みそうになるのよね。とりあえず髪を編み込みにしてまとめてきたのは正解だった。ここにはいわゆる「女を武器にしている」風な女子社員は見あたらない。なんとなく、結婚より仕事を選ぶような雰囲気がある。

「じゃあ、若菜さん。まずはあなたのロッカーに案内するわ。それからどれくらいの仕事ができるか確認したいんだけど。あなたエクセルは使えるわよね、テンキーのタイピングも大丈夫？」

最後のひとことには「もちろん」という断定的なニュアンスが含まれていた。思わず背筋がピンと伸びる。

「はっ、はい！ ひととおり講習は受けてきました」

前の会社ではほとんどお茶くみ・コピー担当で、キャリアっぽい仕事はまったくまわってこなかった。今回の再就職活動で一番痛感させられたのが、自分自身の社会人スキルの低さ。よくもあの仕事内容でお給料がもらえてたよなと、振り返って不思議になった。

「そう、なら良かった」

メガネの奥で鋭い視線がきらりと光る。これもなにかの試練だろうか、再び身の縮まる思いがした。

「カネヲ貿易」と言えば、この業界ではかなり名の知れた企業のひとつ。都内には本社のほかに三つの支社があり、それぞれに担当部門が異なってる。国内外で流通部門を中心に幅広く展開していて、最近ではアジア諸国への進出が成功を取めたことで、さらに波に乗ってるって感じ？ 年内には米国にも支社ができるのか。それくらいは誰でも知っていることだ。

大都会の一等地に三十階建ての自社ビルを持ち、その内の半分をカネヲ貿易の本社として使用。そのほかのフロアは賃貸になっていて、すべてが埋まっている状態。一階ホール奥のエレベーター横の壁にずらりと並んだテナントのプレートが圧巻だった。こういうのを「飛ぶ鳥を落とす勢い」とか言うんだね。

配属された営業部二課は十六階フロア、ロッカールームは三階の一番奥にあつて、慣れないうちはかなり手間取りそうだ。できるだけ時間に余裕を持って出勤するようにしよう。

「はい、こつちがやつてもらいたい仕事。この伝票の右下の数字、それを表のこの欄に順番に打ち

込んでいって。もちろん途中で入力が飛んだり、順が入れ替わったり、そう言うのは御法度よ。伝票は手書き文字だけど、まあこれくらいなら読めないことないでしょう？」

ロッカールームの使用についてのひととおりの説明を受けた後、会社から支給される女子社員共通の制服に着替えた。白ブラウスにライトブラウンのタイトスカート、同色のベストの組み合わせ。どこにでもあるようなデザインだけど、シルエツトがすっきりしておしゃれな感じに見える。

元の部屋に戻ってきた私は、自分用に準備されていたデスクに案内され、今日の仕事を与えられた。「は、はい。……大丈夫だと思います」

あ、ちよつと自信のない返答をしちゃったかな。やる気がないように思われたら大変。だけど、渡された伝票の量が半端じゃないんだもの。ナンバリングがされて二百枚でまとめられたものが十束。しかも一枚一枚めぐりながらでしょう？ 慣れるまではかなり手こずりそうだ。

「じゃ、よろしく」

平野さんは余計なことと言わないタイプらしい。さつさと話を終えると、あつという間に自分の持ち場に戻っていった。へえ、ちよつと驚き。もつと仕事の内容とか事細かに説明されるのかと思っていた。そもそも「派遣」っていうのはこんなものなのか。とにかく与えられた仕事をきちんと終えればいいのか。

よーし。

カーソルが指定して太枠になっている欄に、四桁の数字を打ち込んでエンター。するとそのままにもしなくても入力欄がひとつ下に自動的に移動するから、次の伝票の数字をそこに。たまに五

桁や三桁もあるけど、そこに注意して途中でこまめに確認をすればいい。波に乗ればどうにかなるかも、それでも学生時代からキータイピングは結構得意だったのよね。

久しぶりに与えられた仕事だからってこともあったんだと思う。一度集中し出すと周囲の物音も耳に入らなくなつて、時間の流れも忘れちゃう。

そんなこんなでどれくらい経つてからだろう、伝票の束を三つ片付けた辺りでさすがに肩が重くなつて小休止した。肘を曲げたままぐりぐりと肩を前後にまわすとても気持ちいい。まだまだ先は長いけど、どうにか頑張れそうだ。

そこでようやく顔を上げて、自分の置かれている状況をひととおり確認した。

部屋の大きさは、わかりやすくいうと学校の教室二倍くらいの広さ。そこにずらりと机が並べられて、少なく見積もつても三十人くらいの人間がいる。みんなパソコンに向かって機関銃のようにキーを叩いてるか、難しそうな電話をしているか。中には当たり前のように英語でしゃべっている人もいる。男女比はだいたい半々くらい。現在半分の机が空いている状態だ。席を外しているのかな？ それとも、もともと空席？

そんなことを考えてから、もう一度頭を目の前のデータ入力に戻そうとしたとき。背後から平野さんの声が出た。

「あら、お帰りなさい。吉田くん」

キーに伸ばしかけた指がふとまとったのは、その声が私や田之倉課長に向けられたものとはまったく違う響きを持っていたから。それだけじゃない、ふつと部屋の中の空気が変わつて、少なくとも

もフロアの半分の視線がさつと動いた気配がした。

「お疲れ様、成果はどう？ 今、コーヒーを淹れるわね」

一体どんな顔をしてしゃべっているんだろう？ そんな興味がとまらなくなつて私が後ろを振り向いたのと、相手の男が口を開いたのが丁度同時だった。

「いえ、自分でやりますから大丈夫です。あ、ついでに平野先輩の分もお淹れしましょうか？」

うわー、かなり上手に立ちまわつてませんか？ と言うか、部署内の全女性社員の注目を浴びちゃつてみたいですけど。そう思いつつ、私の視線は自然と書類の入った封筒を脇に抱えた男の方へ――

「……あ……」

ちよ、ちよつと待つて。こんなことつて、アリ？

そこに立つていたのは忘れるわけもない、昨日会つたばかりの失礼千万なあのお男じゃないの！

もちろん、相手もすぐに私の存在に気づいた。だけど、一瞬「おやおや」つて眉を動かしたただけで、すぐに視線を平野さんに戻してしまふ。

「彼女が、新しい派遣の子ですか？」

その言葉に大きく頷いた平野さんはとても満足そう。

「ええそうよ、課長が連れてきたの。例のお試し期間の子よ」

それほど騒がしくない部屋だから、会話の内容が一から十まで丸聞こえになつちゃう。平野さんの言葉は「例の」つて部分が妙に強調されていた。なんなのよ、一体。もちろん腹を立てられるよ

うな立場じゃないけど、あまりいい気はしない。

「とうか、アイツってこの社員だったの？ なるほどね、あの課長といい彼といい、相手の神経を逆撫さかでするのは社風だったんだ。」

「ふうん、それはご苦労なことですね」

「いいわよ、無理に憐れんでるみたいな表情を浮かべなくたって。わざわざ何度も指摘されなくたって、存分に「試されて」みるからね。せっかく手に入れかけた仕事、誰が簡単に手放すもんですか。確かにかなり動揺したのは事実、でもだからっていつまでもそれを引きずっている私じゃないの。くるりと椅子を元に戻して仕事再開、なかなか元のペースに戻れないものの、どうにか雑念を追っ払うことに成功した。「だだだ」って機関銃みたいにキーを叩いていく。」

「でも、またすぐに作業を中断する羽目に。通路になっっている右手側に誰かが立ちどまったんだもの。」

「やあ」  
え、なんでわざわざやってくるのよ。しかも片手には湯気を立てたコーヒーマグを持って。ほらほら、また部屋の空気がざわわって動いたわよ。見られてるっ、絶対に注目されてるんだから。」

「は、初めまして。若菜梨実と申します、よろしくお願ひいたします」

とても無視できる感じじゃなかったから、仕方なく立ち上がって挨拶した。それなのに、なんなの。こっちがあくまでも大人の対応をしてやったのに、彼は明らかに「初めまして」の言葉に反応している。しかもそれが面白がっているような突っ込みたくて仕方がないような、人を小馬鹿にした

態度なのよね。

「吉田です、こちらこそよろしく。若菜さんには僕の仕事もやってもらうことになるから、これくらいいろいろと世話をかけると思うけど頼んだよ」

「あー、そこでまた意味深に微笑むしっ。」

「なによ、この人。新人をおちよくるのが趣味なの？ それにもしかして、私にここにやって来る人間だつてことを、昨日の時点で知っていたのかな。だとしたら、すごく嫌な性格じゃない？」

「おー、吉田。さつきから部長が探していたぞ、たぶん今は下の会議室だと思うけど」

私が成り行きでコーヒーマグを受け取ったところで、三列ほど向こうのデスクに座っていた男性社員から声がかかる。それとほぼ同時に、クリップどめした書類を手にした女子社員が立ち上がった。

「吉田さん、こちらが先日の資料をまとめたものですので、至急確認をお願いします。それから、広報の田中さんも連絡欲しいそうです」

「な、なんなの。戻るなり、いきなり大人気ですかっ。」

「あつという間にいくつかの資料の束とメモを手にした彼が座ったのは、なんと私の真向かいの席。もちろん、書類やらなにやらで仕切られてはいるものの、顔を上げたらすぐにアイコンタクトできちゃうわ。……いやいや、そんなことを気にすることもないか。……仕事、仕事。」

二度目の仕切り直し、今度は本腰を入れて集中しなくちゃ。

——そう思って伝票の束をめくろうとしたら、そこにはついさっきまではなかったはずのピンク

の付箋が張り付いている。

『昨日の打ち合わせの続き、PM7:00でOK?』

なによコレ！ って即座に握りつぶしてゴミ箱に投げ捨てたけど、もしかしてシュレッターにかけた方が良かったかしら？ 一体どんな顔しているのかとちらつと盗み見してみれば、奴は涼しい表情でパソコンを立ち上げていた。

3

「ふうん、アナタって思ったよりも使えそうね」

ランチ休憩を挟んで延々と頑張った上に、一時間の残業。初日からそこまで頑張らなくてもいいんじゃないかと自分でも呆れたけど、せっかく先が見えてるのに途中で切り上げるのは絶対嫌だと思つた。さすがに最後の方は頭の中が真っ白になって、自分でもよくわからないままにキーを叩き続けていた感じ。それでも見直したデータに不備はなく、自分で自分を褒めてあげたくなった。

「あ、ありがとうございますっ！」

もちろん、平野さんは私の残業に付き合ってくれていた訳じゃない。彼女には彼女が担当している仕事があつて、まだまだ居残りそうな勢い。へえ、定時で「お先に失礼します」とかそういう雰囲気じゃないんだな。部署内もほとんどの人が残つてるし。

「いいわ、今日はもう上がつて。でも、こんなのいつものことだから覚悟してね。慣れてきたら三倍くらいのスピードでこなしてもらおうようになるわ」

あつさりと言いつつ切られてしまつて、しばし呆然。

もしかして、これくらいは序の口つてこと？ そりゃ、世の中には私の知らないような仕事も山のようにあるとは思つてたけど、こういう大量のデータ処理を、来る日も来る日も片付けている人もいるつてことよね。結局、あれつてなんの数字だったんだろう？ でもその詳細まで考えてたら、仕事に集中できなくなっちゃいそうね。

「は、はいっ。それでは、お先に失礼させていただきます」

本当はこういうときに「なにか、お手伝いをするのがあれば」とか声をかけた方が印象良かったのかも。でもちよつと限界来てたし、申し訳ないけど今日のところはお言葉に甘えさせてもらうことにした。

ホッと脱力した瞬間に、今度は両肩から腕先までがびーんと堅くなる。すごい、極限状態を超えた凝り方だよ、コレ。なんのケアもしないまま放つといたら、明日大変なことになりそう。ああ、早く家に帰ろう。そして、熱いお風呂にゆつくりつかつて疲れを取るんだ。

ロッカールームに向かうまでも、足下はだいたいぶよろよろしていた。どうにか私服に着替えてエレベーターに乗り込んだ頃には、立ってるのもやつとの状態。こんなん地下鉄を乗り継いでアパートまで辿り着けるかなあ、途中で倒れちゃつたらどうしよう。

我ながら、情けない限り。どうしたんだ自分、久しぶりの仕事なのはわかるけど、こんなにバテ

なくたっていいじゃない。

完全にヤバイ、体力も人並み以上に必要な職場みたいだし、少し慣れたらジム通いでも始めた方がいいかもしれないなあ。だけど、それにも先立つものが必要なんだよな。

ほとんど気力だけでエントランスを抜けて、回転ドアから夜のオフィス街へと出て行く。これじゃまるで夢遊病者、ここは気合いを入れてしゃんとしなくちゃ駄目だって。

ガラス張りの壁に映った自分にぎよつとして、慌てて背筋を伸ばす。うわー、浦島太郎もびっくり。たった一日でこんなに老け込むなんてあり得ないわ。

——と。

真横に艶々に輝く濃紺の車がとまった。するりと細長い新幹線みたいな外見。ごめん、私詳しくないから、上手に説明できないけど。とにかく素人目にも、かなりの高級車だってことくらいはわかった。

「どうしたの、遅かったね」

そんな声がしても、まさか自分が呼びとめられているなんて思わないよね？ だから、さっさと歩き出した。そしたら、のろのろとその車が後から追いかけてきて、しかもクラクションを鳴らすのよ。

「な——」

三十メートルは進んで、なんだかおかしいなと立ちどまる。そして振り向いたところで、私は口を開きかけたまま固まってしまった。

「まったく、君にはいちいち楽しませてもらえるね」

颯爽とした身のこなしで運転席から降りてきたのは、今日配属された部署でも「デキル男」で通っているらしい、その人だった。

まあね、その瞬間まであのメモのことをすっかり忘れていた私もどうかとは思う。

でもあんなのって、一方的な押しつけでしょう？ なんていちいち従う必要があるのよ。だいたい、こつちの都合も聞かずに決めつけて、腹立つつたらない。

「さ、早く乗って。ここ駐禁だから、急いで欲しいな」

とりあえず助手席のドアなんて開けてくれたりして、格好つけてるつもりかしら。でもでもっ、やっぱり口元がにやけてるし！ ああ、本当に嫌な奴。

「……」

痛烈な一言を突き返してやろうとは思ったわよ、でも慣れない仕事のあとで頭がまわらなくなっていて、言葉なんか浮かんでこない。せめて無言で睨み付けたあと、さっさとさびすを返した。

だいたい、なんで私があんたの車に乗る必要があるの？ いくら同じ会社の人間とわかったからといって、よく知らない異性といきなり密室とか危険すぎる。

「ひとつ、忠告してもいいかな？」

あいにく目の前の信号は赤。立ちどまった私のすぐ後ろに、奴の車はくつついてきていた。

「君がこれから乗る予定の地下鉄、十分くらい前からとまってるよ？ 電気系統の故障だって、復旧のめどは立ってないって書いてあるけど」

「ご大層に身を乗り出して、携帯の画面を見せてくれる。思わず表情が凍りついてしまった私を、男はこの上なく嬉しそうな顔で見上げていた。

「言つときまずけどね？」

気がついたら、当然のように助手席に座ってシートベルトを締めていた。

なんなの自分、この流れるような自然な行動は。あり得ない、本当にあり得ないつたら。

「打ち合わせがなにとか、そういうの興味ありませんから。だいたい、どういうおつもりなのかは知りませんが、退屈しのおのぎの相手にされたら迷惑です」

一応、上司？ ううん、この人には肩書きとかなかったっぽいから、正確には先輩ってことになるのかな？ どちらにしても新米も新米の私よりは偉い人になるんだろう。でもそれって、あくまでも「職場では」という注意書きがついていいはず。勤務時間外に上下関係を引きずるのは公私混同ってやつよ。

「ふふ、そうカリカリしなくなつていいじゃない。僕たちは、これから長い付き合いになるんだから」

運転はあくまでもスムーズ。あちこちでブレーキランプが点滅する混み合った道を危なげなくすいすいと進んでいく。頻繁に車線変更とかもしているものの、そのやり方に強引さはなくて、不思議なくらいほかの車が好意的に道を譲ってくれてるようにも見える。

「なんですか、それ。もういい加減にしてください」

本当、冗談でもやめて欲しいのよね。なんなのよ、この人。突然初対面の人間に訳のわからないことを言い出したかと思つたら、翌日なに食わぬ顔をして再登場して。これが二時間で終わるサスペンスドラマだったら、視聴者の誰もが「コイツが絶対に怪しい！」って思うはずよ。

「いいねえ、そのツンツンしたところ。やつぱりこれからの女性はあらゆる意味で強くないと生き残れないからね、大いに結構なことだと思つうよ？」

こつちの話をことごとくスルーして、やがて彼は左のウインカーを出す。え？ と頭上を通り過ぎる案内板を目にしたときにはもう遅かった。

「あのっ、どこかの駅の前で降ろしてくださいさすれば結構です。路線が違えば、電車も動いているですよっし」

対向車とすれ違うのがやつとなくらいの細い路地に入り込まれたら、やつぱは焦るよね？ いやその、いきなりはないでしょう。

「いって、いって、遠慮しなくても。用事を済ませたら、ちゃんと送るから」

急に視界が開けて、危険な思考も一掃される。目の前に広がるのは、先ほどまでの風景とは一転して閑静な高級住宅地。ええっつ、どういこと？ ここ、まだ都内だよ。なににこんな広い庭付きの家がたくさんあるのっ！

「よっ、……用事って？」

「そ、物件を紹介するなら、ちゃんと中を見てもらわなくてはね。多少散らかっているけど、そこるところには目をつむつてくれるかな？ 昨日の今日だし、あまり手がまわらなかつたんだ」

長い長い並木通りを抜け、住宅街が切れたところに突然現れたどどかいマンション。高台にどーんとそびえ立つ姿は圧巻だ。しかもすぐそばをJRが通ってるけど、ここってどこ？ 濃紺の車はあつという間に地下駐車場に吸い込まれていく。

そりゃ、どこかで待ったをかけるべきだったとは思う。でも、あつという間に到着しちゃって、そのタイミングをすっかり失ってしまった。

「さ、着いた。行こうか？」

奴はさつさと車を降りると、当然のように助手席側にまわってドアを開けてくれた。

エレベーターに運ばれて着いたのは、エントランスのような場所。人間の身長よりも大きな観葉植物がいくつも置かれていたりして、なんだか不思議。しかもその脇には触るのも躊躇ためらわれるほど高級そうな壺や陶器の人形も鎮座してる。

「ちよつと失礼」

二重になつてる自動ドアの前に立った男は、まずカードみたいなものを機械に通してから、手慣れた動作で傍らかたわにある金属製の装置に触れる。ええつ、これつてもしかして指紋の照合で相手を認識する最新鋭の装置？ それからいくつかのボタンを押して、ようやくこちらに振り返った。

「じゃあ、君も。ここに立って、プレートに手を置いてくれる？ 初めての訪問者はここで情報を登録しないと先に進めないんだ」

はあつ、なによそれ。どうして私がそんなことをしなくちゃならないの。

「ほらほら、時間をかけすぎると警備員が飛んでくるよ？ このセキュリティはかなり嚴重だか

ら。それに必要以上にきよるきよるしない方がいい、監視カメラがあちこちから見張ってるから」

ひどいっつ、いきなり犯人扱いですか？ とか思いつつも、そんな話を聞かされたら、さつさと終わらせちゃおうとか焦あせるよね。ああ、小心者な自分が憎いわ。

「さあ、どうぞ」

吹き抜けになったホールの突き当たりにあるエレベーター、それに乗り込んでまたびっくり。

「あれ、なんでボタンとかないんですか？ これじゃ、行き先を指定できないですよ」

ほらほら、だって普通はドアの横に数字が書かれたボタンがずらつと並んでいて、その中から利用するフロアを探して押すでしょ？ それどころか開閉ボタンもないよ、一体どうなってるの。

「心配しなくても大丈夫、このエレベーターは今、僕たちのために動いているんだから。そういうシステムになってるんだ、まったく便利な世の中になったものだよ」

踏みつけるのを躊躇うほどのふかふかマットが敷かれた床、私たちが乗り込んだのを確認するように静かに閉まるドア。音もなく上昇する四角い箱は、まるでテーマパークのアトラクションみたいに高速で移動していく。そして――

「……えっ!？」

エレベーターの壁の一部が急にポツと明るく光ったかと思うと、そこに「最新ニュース」とか「株式市況」とかの文字が次々に表示される。どうも、壁にあるセンサーパネルで操作できるみたい。

どうなっているの、近頃の物件って。なにしろ自分が住んでいるところが、昭和の忘れ物みたいな年代物のアパートだからなあ。人づてにいろいろ話は聞いてたけど、実際に体感すると腰が抜け

そうだけ。

ようやくドアが開いて降り立ったのは、最上階の十八階。内廊下の壁面はダークカラーの木目調だし、ここにも高級ホテルっぽい雰囲気は続いている。

で、部屋の中に案内されてまたびつくり。なんでこんなにドアがいっぱいあるの？ まさか開いた先が異次元にでも繋がっているんじゃないでしょうね。

「よ、4LDK……？」

「そう、そのうち二部屋は僕がベッドルームと書斎に使ってるけど。あとは手付かずだから、どちらでも好きな方を使っていよいよ。なんなら二部屋とも自由にしてもらってもいいし」

な、なにを言っているの、この人って。一応、日本語で話しかけられているみたいだけど、内容が全然理解できない。玄関を入ると両側に壁を見ながら少し進んで突き当たり、廊下が左右に続いている。その左手奥にはガラスのはめ込まれたドアがすぐあって、彼はそこを開けた。

「で、ここがリビングダイニング。左手の奥がキッチンになってる」

なによ、この無駄に広いスペースは。

こっぴどく私が住んでいるアパートの一部屋がすっぽり入って隙間がたつぷりできちゃう。ひとり暮らしだから必要ないんだろうけど、本来ならば置かれてるはずのダイニングテーブルも見あたらないし。とにかくもつたいなさすぎ、地価だつてべらぼうに高いに違いないのに。

「は……はあ……」

すごいなあ、一抱えほどもある大きさの液晶TV。これって何インチなんだろう？ その上、ソ

ファアの脇とか部屋の数ヶ所には縦長の黒い物体が置かれている。ええと、これってスピーカーなのか。お父さんがオーディオ機器に凝ってるっていう友達の家で一度だけ見たことがあるわ。臨場感たつぷりの音響が堪能できるんだとか。

キッチンはお決まりのオール電化、巷で噂のIHよ。その上、食洗機とオーブンレンジもビルトイン。……で、なんだろう、この水切り台の脇にあるボタンは。

「あ、それ『ディスプレイ』のスイッチ。生ゴミはそのまま排水溝に流すと、細かく粉碎して下水に流してしまうんだって。本当に便利だよ、お陰でほとんどゴミも出ないし」

えー、それって下水管が詰まったりしないの？ 全然想像もつかないんですけど。

とにかく見るもの触れるものが信じられなくて、驚いてばかり。なにが「多少散らかってる」ですか、業者が入ったみたいピカピカに磨き込まれているじゃないの。

「で、さっきの廊下を反対に行くと浴室がある。結構使いやすいとできていると思うんだけど、女性としての評価はどうか？ さあ、案内するよ」

そろそろ、本気で目眩がしてきた。どうするの、いきなり温水プールみたいに広いバスタブが出てきたりしたら。それとも内装から浴槽から総檜造りの純和風？ いいや、どっちでも。とにかくもう、これ以上はたくさん。

「いえ、……遠慮しておきます。だんだん気分が悪くなってきましたので、この辺で失礼させていただきますい」

もう嫌。これ以上の話は聞きたくないし、この空間に存在することだって拒否したい。初めから

こっちは全然乗り気じゃなかったんだよ？ それなのに次から次へと信じられない話や出来事ばかり起こって、対処できるはずもないじゃない。

「えー、そうなの？ 残念だなあ、これから一緒に食事でもと思っていたのに。この近くにいいレストランがあるんだ、どう？」

いやいや、本当に結構ですから！ そうそう、すぐ近くを電車が通っていたじゃない。それに乗って帰るから、見送りだつて必要ないわ。

「あ、待つて。頼むから送らせてよ、ここまで無理矢理連れてきたのは僕なんだから。せめて罪滅ぼしをさせて欲しいな」

そう言いながら、彼は携帯を取り出してなにやら操作してる。

「ほら、パーキングから車を出す手続きをしたから。五分後にさつき乗ったエレベーターの前に運ばれてくるんだ、便利でしょう」

もう反応する気力もありませんって。戻りのエレベーターは地下パーキングまでノンストップ。相変わらず仰々しい液晶パネルは、私の疲れ切った心と身体に最後のくさびを打ち込んでくれた。

「うーん、我ながらなかなかの物件だと思ってるんだけどな。気に入ってもらえないなんて残念だ。でもまだ思い直す余地はあると思わない？ インテリアでも設備でも、君の気に入るようにすぐにでも変更させるよ」

口を開くのも面倒なくらいだったから、意地悪かなとは思ったけどアパートの現住所だけを告げ

た。それでわからないって言うなら、すぐに降ろしてもらおうと思つて。

でも意外や意外。彼は最新鋭のカーナビのお世話になることもなく、勝手知ったるといった感じで車を走らせてる。なによ、格好つけているつもり？ そんなのに誤魔化される私じゃありませんから。

「……そちらこそ、別に私ひとりにこだわることもないでしょう？ さつきとほかを当たっていただけませんか」

本当に訳がわからない。なんでいきなり目の前に現れて「一緒に住もう」とか言い出す？

ほかに選択肢がまったくなって、どうしようもないって言うなら話は別よ？ でもコイツの場合、絶対そうじゃないもの。

昼間のオフィスでの女子社員たちの様子。彼の一举一動にアンテナをぴりぴりと反応させて、好機をうかがっている感じだった。一見クールな平野さんだつて、ぎよつとするくらい態度が変わつてたじゃない。

『いい物件があるよ』

——昨日の台詞を彼女に言つたら、ふたつ返事でオッケーされると思いますが？

「うーん、それがねえ……こっちは急いでるし。できれば、このまま君で決めてしまいたいんだけど」  
なんなのその、やつつけ仕事みたいな感じは。誠意の欠片も感じられないし、そんなので女性の心を掴めると思つたら大間違いよ。いくら条件が良くてルックスも合格点で非の打ち所がない相手だつたりしてもよ、それよりもなによりも、もつともつと大切なものがあると思うんだ。

「申し訳ありませんが、あなたの仰おっしゃつてゐることは最初から最後まで理解不可能です。私はエスパーではありませんし、言葉にならない行間に隠されたものを読み取ることもできませんから」

幸いなことにここまで胡散うさん臭いと「もしや……」とか勘ぐる必要がまったくなくて楽ね。なんか勘違いしているのかもよ、この人。

「きつついなあく、梨実ちゃん。結構可愛い顔してるのに、その性格じゃ損をしてしまうよ？ もっと上手に立ちまわらなくちゃ、人生面白くないでしょう」

あく、そういう言い方すれば、こつちが喜ぶでも思った？ おあいにく様、自分のことはよくわかっているつもりなの。私みたいなタイプはね、何事も実力で掴つかみ取るしかないのよ。

「じゃあ、吉田さんと一緒にいれば楽しくなるんですか？ そんな都合のいいこと、あるわけないですよ」

本当におかしなことを言う人だと思うわ。そりゃあね、道行く人が振り向くレベルの男なら、隣にいてもいいかなと思つてみたりはする。でも、それでも、コイツだけは嫌。こうやって、今みたいに同じ空気を吸つてるだけでも鳥肌立つちゃうもの。

「ふふふ、僕は今でも十分楽しませてもらつてるけどね」

緩やかなカーブを曲がると、そこには見慣れた風景が広がつていた。あれれ、いつの間にかこんなところまで来ていたの？ すごい、あのマンションを出てから、十五分かそこらしかかかつてないよ。私、東京都心の地図つてまったく頭に入つてないし、どういうルートを使ったのかも全然わからない。

やがて、すっかり闇に包まれた町の片隅に車がとまった。

「あ、ありがとうございます。それでは失礼します」

一応、お礼だけは言つたわよ。これくらいは大人のマナーよね。そそくさと車を降りたら、そのまま振り向きもせず歩き出す。でもわかるわ、古ぼけた街灯に照らされたピカピカの車が周囲の風景にあまりに不釣り合いであることぐらいは。

暗がりだとさらにみすばらしく見えるアパート。今にも崩れ落ちそうな外階段に足をかけたとき、ぱたぱたとサンダルの音が聞こえてきた。

「あつらく、若菜さんっ！ 待つてたのよ、遅かつたわね！」

いやいや、そんな大声で言わなくて。まだ午後八時をちよつとまわつたところじゃない。

「こんばんは、いつもお世話になってます」

一応ね、愛想笑いとかしてみる。だつて、大家さんだし。こつちに出てきてからずっと面倒見てもらつてたんだしね。でもお婆さんの方はなにやら慌てた感じ、悠長な会話にはとても付き合つてられないって様子だ。

「あのさ、あなたは昨日も遅かつたから言いそびれてたんだけど。この前から言つてたここ一帯の取り壊し、早速明日から始まることになったから。悪いけど、今夜のうちに荷物をまとめて運び出してもらわないと困るよ」

はあ？ なんなのよ、それ。聞いてないから……！

「そ、そんなっ！ いきなり言われても……」

疲労困憊けんぱいの身体からよくもまあ、って思うくらいの叫び声が出た。

そうっ、そうよ。私、賃貸の契約のことは正直よくわかってないところもあるけれど、こんな急な話をされて「はい、そうですか」って言えるわけないじゃない。それくらい、少し考えればわかりそうなものよ。

でもおばさんの方は、さすがに年季も入ってて、ちよつとやそつこのことじゃ動じる気配もないみたい。腰に手を当てたお決まりのポーズで、当然のように言つてのける。

「なに言つてるんだい、別に急な話でもないだろう。この前からちゃんと伝えていたはずだよ。それにごらん、あんた以外の皆さんはもうほとんど片付けを終えて出てつてくれたからね」

えっつ、嘘！　つて見てくれはどうであれ一応「アパート」と呼ばれる建物を振り返ると、普段なら明かりの漏れている窓のどれもが真つ暗。しかも通路に置かれた段ボール箱とかで足の踏み場もない感じになつてる。

「一番のんびりしていた人でもね、すでに荷造りは完了して明朝早くに全部運び出してくれるって話だ。だから残るはあんたひとり、よろしく頼んだよ？　こつちもいろいろと手続きがあつてね、あゝ忙しい、忙しい」

……ちよ、ちよつとつ！　ちよつと待つてよ……!!

一難去つてもいないのに、また一難。先日、話を切り出されたときは「そんなこと言つたつて、明日や明後日どうなるつてこともないでしょ？　大袈裟だよ」なんて悠長に構えていたのが良くなかつたのか。

さつさと話を切り上げた大家のおばさんは、あつという間にいなくなつてしまい、私はその場にひとり残された。

——否、違う。後ろから規則正しい靴音が聞こえてきたわ。うう、すごく悪い予感。

「なにやら、お困りの様子だけど？　良かったら、手を貸そうか」

ま、まだいたのっ!?　さつさと帰ればいいのに。それにまた携帯を取り出して、どこかに連絡してるし！

「あゝ、僕だ。急で悪いけど、トラック一台まわしてくれないかな？　うん、道が狭いからそんな大きなやつじゃなくていいや。それからトランクルームも借りられる？　そう、僕の隣が空いていればそこがいいな」

ど、どうなつてるのか……さつぱりわかりませんけどっ！　まだ半分、頭のまわつていない私が見守る中、彼はのんびりと通話を終えた。そして、こつちを振り向くと勝ち誇つた微笑みを浮かべる。「さ、急いで荷造りしてもらわないと。車は三十分後には到着するそうだよ」

まあね、どう考えたつてそんな短い時間でなにができるわけでもないでしょう。わたわたしているうちに、トラックはやつてきて、こういうことに手慣れた人たちが数名が私の部屋へと乗り込んできた。

「じゃあ、当座使うものだけをこちらにお願いします」

そうやつて渡されたのは、ハンガーを吊すだけになつている箱とか、たくさん仕切りのついた箱

とか。とにかく考えている暇もないから、ダンスからどんどん取り出して詰めていく。ああ、収納場所なんて本当にちよつとしかないのに、どうしてこんなにしまい込まれるのかな。

このアパートってね、説明するまでもないほどシンプルな間取りになっているの。

玄関を入ると右手の通路脇にシンクとガスレンジ置き場があつて、もう一方の壁にあるふたつ並んだドアの向こうがトイレとお風呂。そして突き当たりが六畳間——と言われたけど、とてもそれだけの広さはないと思うダイニング兼リビング兼寝室？ 突き当たりの窓の向こうはベランダなんてご大層なものは存在しなくて、一応布団干し用の手すりが付いている。

どー考えてもうら若き乙女には相応しくない部屋ではあつたわ。だけど仕方なかったんだもの、親の反対を押し切つて始めたひとり暮らしで贅沢はできない。もちろん、実家からの仕送りなんてあるわけないし。

「へえ、なかなかレトロな部屋だね。梨実ちゃんって、こういうところが好みなの？」

うつわ、さつきから気になつてはいたんだけど。どうしてこの人、馴れ馴れしく人の名前を呼んでるの？ そんなの許可した覚えもないんだけど。

当然のように部屋に上がり込んで、楽しそうに作業の様子を見守っている男。すっかり主導権を握られて「迷惑です」と口を挟むタイミングもなかった。

「だけど正直こつて、取り壊しになつて正解だつたと思うよ。一応それらしくは造つてあるけど、耐震強度にかなり問題がありそうだし」

知つたかぶつて勝ち誇つたように言わなくなつていいじゃない。私だつてね、もうちよつと収入

にゆとりがあつたら、もつと条件のいいところにさつきと引つ越していたわよ。それができないから、ここに留まつていたんじゃない。どんな劣悪な環境だつて、うるさい両親がいる実家に連れ戻されるよりずっといい。

「そんなところに突つ立つていられたら、邪魔で仕方ありません。外でお待ちになつたらいかがです？ 埃ほこりで服が汚れますよ」

そうなんだよね、今まで「場違い」つて言葉は一般庶民がすごく高級な場所に引つ張り出されたときに使われるものだつて思つてた。だけど、逆の場合もあり得るんだな。

今までささやかではあつても私の大切な「城」であつた部屋に、あまりにも不似合いな男。昼間のオフィスで見たときはそんなに感じなかつたけど、よくよく見たらかなり値の張りそうなスーツよね。それを着込んでいるだけでも、CGで無理矢理合成了みみたいに浮いてるわ。

「いや、お気遣いは無用。それより、是非君の荷造りを手伝わせてもらいたいな。ほとんどのものは揃つてるから必要ないけど、さすがに女性の身のまわり品は置いてないから」

ひーつ、そんなことされてたまるんですか！ やめてよつ、そつちは下着の入つた引き出しなの。本当、なに考えてるのよ。他人の部屋に上がり込んで、失礼この上ないわ。

「すつ、すぐに片付きますから。だから、触らないでください！」

なに、お願いしているんだ、自分。相手は不法侵入者なのに。

そんなこんなしているうちに、あつという間に部屋の中は空っぽ。家財道具はすべて運び出され、待機していたトラックに積み込まれていた。

「さ、それでは参りましょうか？ 姫君」

やっぱ変だよ！ この人って、絶対になんかおかしいっ！

ほらほらっ、お揃いのつなぎを着込んだお兄さんたちが、物珍しそうに振り返ってるじゃないの。

「……あつ、あのーっ……」

そりゃあね、引っ越しを手伝ってくれたことには感謝する。私ひとりだったら、とてもこうはいかなかったはずだし。もしかしたら最低限生活に必要なものすら運び出せないうちに、アパートがスクラップになっていたかもしれないわ。

でもね、だからと言ってね――

「ほら、都合のいい逃げ道なんてあると思ってるの？ 君も本当に往生際の悪い子だねえ」

さっき降りたばかりの車に再び押し込まれて、ドアの閉まる刹那に言い添えられる。

「梨実ちゃんの当座の荷物は全部、僕の部屋に運んでもらったから。明日、遅刻しないで出勤したかったら素直に言うことを聞いた方がいいと思うな。早々にクビになっても構わないって言うなら話は別だけど」

もしかして、今回のことって最初から最後までコイツの差し金っ!?

そうであっても不思議がないくらい、気づけばすべての出来事が彼の思惑どおりに進んでいた。

4

「はい、これ。十部ずつコピーお願い、急いでね」

あれ？ 私、今なにしていたんだっけ。

急に声をかけられて、その一瞬前までの記憶がすっかり飛んでいることに驚く。ああ、そうそう。勤務中だったんだ。明るい光のさんと降り注いでるオフィスの輝きが、寝不足の目に刺さって痛い。

「若菜さん？ どうしたの、そんなことじゃ困るわ。言われたらさっさと動く！ 当然のことを言わせないで欲しいわ」

誰にでも丸わかりなくらい、ぼんやりしていたんだろうな。デスクの傍らに立つ平野女史は、わざとらしく書類の束を、私の目の前でたばたと振りかざした。

「はっ、はいっ！ すみません、すぐやりますっ！」

ひええっ、早速注意されちゃったよ。駄目駄目、今朝目覚めた瞬間に、心に誓ったはずよ。引っ越しのことは会社には内緒にしないと都合が悪いんだし、とにかく何事もなかったように一日を乗り切ろうって。ここで食べっぱぐれたら、また振り出しに戻っちゃう。そんなのは絶対に嫌。

「頼んだわよ」

眼鏡の奥からいちいち勘ぐられている気がしちゃうのは、思い過ごしかなあ。私、昨日と比べてどこか変わったところとかないはずよね？ そうであると信じた。でも彼女の横長フレームのレ

ンズ越しに見つめられると、心の中まで見透かされている気分になるの。

コピー機があるのはドアを入ってすぐ左手、つい立ての向こうだ。使い方も昨日教えてもらって。前の会社で使ってたのと同じ機種だし、まあ大丈夫よね。

「……あれ？」

違った、これって最新機種だ。しかも直前に使用した誰かが難しい操作をしたみたいで、いくらクリアボタンを押してもコピー画面に戻らない。ええと、どうしよう。急ぎだつて言われたのに、こんなところで手間取っている訳にはいかないわ。どこかに取扱説明書とかかないの？

「……」

つい立ての陰からこっそり覗くと、平野女史はこちらに背を向けてデスクに向かっている。機関銃みたいにテンキーを叩いている彼女に声をかける勇氣はないわ。やっぱ、自分でどうにかしなくちゃ。

「——あれ？ どうしたの？」

と、そこにタイミンが良すぎに現れる人影。もしやと思つたら、やっぱり「あの」男。わかつた、へんてこな操作をして私を混乱させようとした張本人もコイツじゃないの？

「あ、いえ、別につ……」

なんでもありませんからお気遣いなく、つてこつちが言う前に、さっさとキー操作してるしつ。

コピー機の前でピッピッピッつて三回押してから、こちらを振り向くの。そして、その口元！ なるよ、勝ち誇つたような微笑みを浮かべちゃつて……！

「ほら、これで大丈夫。初心者でわからないのは当然なんだから、困つたらさっさと助けを呼んだ

方がいいよ。自己流でどうにかしようとして、高価な機材を駄目にしたりしたらそれこそ大変だしね」

君だつたらやりかねないし——つて、言いたげな感じ。ああつ、ムカつく！

「あ、ありがとうございます」

それでも神妙に頭を下げる事ができる私つて、本当に偉いと思う。

すると彼は「どういたしましたつて」つて感じで軽く会釈をすると、私の脇をさっさと通り抜けていく。——と、思つたら。

「……冷たいじゃない、こつちは一緒に出かけようと準備して待つていたんだよ？ それに、ほら。忘れ物だつてしてるし」

そう言つて、すれ違いざまに胸のポケットに押し込まれたもの。それはあの最新鋭システムなマシンのエントランスカードキーと、部屋の鍵だつた。

そう、昨夜は結局、奴の部屋に泊まることになつてしまつた。

だつて、引つ越しの作業を終えたのはすでに日付の変わる頃。そんな時間に妹夫婦の官舎に転がり込むわけにもいかないし、かといつてほんの数時間の休息のためにホテルを取るのもあまりに不経済。こつちはカツカツで生活してるんだから。

「君の荷物は部屋に届けられているし、今更遠慮もいらないでしよう」

ものすごいヤバい成り行きのような気もしたけど、心身ともに疲れ切つたところにさらに鞭打たれたこの状況では、ほかに選択の余地はないように思われた。とはいえ、良く知らない男の部屋

に転がり込むなんて、絶対にやっちゃいけないこと。ドアが閉まって密室になったとたんに襲われたら、さすがに逃げられないもの。

そしたら。彼は超ゴージャスマンションの最上階に戻ってきたところで、まるでこっちの心を読んだように言った。

「僕は部屋のシャワーを使うから、君はバスルームでゆっくり。部屋には中から鍵がかかるから、心配はいらないよ。じゃあ、おやすみ」

そう言うと、リビングとは反対側の突き当たりにある部屋にさっさと入ってしまう。内側から施錠する音がはつきり聞こえて、まーっ！ どういうつもり？ 私に寝込みを襲われるとも思っただの!?

……それに、部屋にもシャワーがあるって、なんなの？。絶対に、間違ってるから！

「じよっ、冗談じゃないわよっ!」

悪態についてはみたものの、相手に聞こえるはずもなく。荷物が運び込まれたという部屋に入っただけは、そのままベッドに倒れ込んでいたのだ。

明けて、今朝。

どうにか寝坊せずに目覚めることができたのはすごいと思った。近くにあの男の気配がないことを確認してから、向かい側のバスルームに転がり込み、埃と汗と眠気を洗い落とす。

さすがに温水プールほどの広さではなかったものの、手足をゆったりと伸ばしてもまだ余るくらいのバスタブには、なみなみとお湯が張られていた。ゆっくり浸かる時間がなくて残念。それでも

強めの水圧が心地よいシャワーをたっぷり浴びると、ようやくと生き返った気がした。本当に、昨日一日は一体なんだったのかしら。まあ、過ぎたことは仕方ないし、どうにか仕切り直ししなくちゃ。過去に煩わされているほど、私は暇じゃないのよ。

一度部屋に戻って身支度を終えても、まだ男の動き出す気配はなかった。とりあえずリビングダイニングも覗いてみたけど、そっちももぬけの殻。あれ、もう出勤しちゃった？ って思ったけど、靴は玄関にあるし。

無理矢理連れてこられた身なのに、まるで狐につままれたような気分だったわよ。でも、奴の部屋をノックしてご機嫌伺いするなんて嫌だったし。だからキッチンのカウンターの書き置きだけ残して先に出かけちゃったのよ、「いろいろお世話になりました、しばらく荷物を置かせてください」ってね。

これ以上は、さすがにまずいと思うのね。だからとにかく、一刻も早く新しい部屋を借りて荷物をすべて引き取らなくちゃ。

……それなのに。

「あゝっ、どうなってるの!」

そんな風にぼやきつつ、夜のオフィス街をひとり駅に向かって歩く私。

今日は定時でさっさと上がって、不動産屋をまわるつもりだった。自分の見通しが甘かったことはわかったし、この前の場所よりもあと二駅ぐらい奥まったところで探そうかなと。

「ただどね、戦場のように殺伐<sup>さうぼう</sup>としているあの場所から「お先に失礼します」ってできるのはかなりの強者。ほら私、初心者だし絶対無理よ。で、結局、残業するはめになっちゃった。

……で、今夜はこれからどうしよう。やっぱホテルに泊まるしかないだろうな。今頃、おんぼろアパートはペしゃんこになっちゃってるはずだし。

あのマンションにのこのこ戻るのだけは避けたい。それって、奴の申し出を承諾してみたになっちゃうもの。もちろん明日の仕事のためには着替えを取りに行かなくちゃならないけど、それは明朝早くでもいいはずだし。

「う~~~~~」

せめてアパートの取り壊しが半月後だったら、状況はだいぶ変わっていたはずなのになあ。ほんつと、タイミング最悪なんだから。

「やあ」

信号が赤になって足をとめたら、後ろから肩を叩かれた。もしや、もしやと思っただけ……振り返るとやっぱ彼が立っている。今日はあの嫌みなくらいピカピカに磨かれた愛車は一緒じゃなかった。

「さあ、行こうか。昨日話したレストラン、予約入れてあるんだ」

その誘いを振り切って逃げるだけの気力も、すでに残っていない。

ただでさえ、コイツの勝ち誇った微笑みは闘争意欲を撃沈させる。しかも、私の意思を完全に無視して、くうつと情けない音を上げるおなか。……いや、あとのことは食べてから考えよう。

案内されたのは、住宅街の一角にある隠れ家的なレストラン。煉瓦<sup>れんが</sup>造りの壁にツタがびっしり絡まっていたりして、しっとりど年季を感じさせる。内装もとても素敵。それぞれのテーブルの上に吊されているのはステンドグラスの傘が付いたランプ。窓の上の飾り棚には外国製のビールの空き瓶がずらりと並んでる。いかにも「こだわりの品ばかりを飾ってみました」って感じよ。

「梨実ちゃん、歩くの速いなあ。必死に追いかけるのにどんどん遠ざかるんだから」

一番奥まったテーブルに向かい合って座る私たち。一見和やかに見えるけど、そこに漂う空気はやっぱ殺伐<sup>さうぼう</sup>としているわ。

「そうですか、きつと本能的に危険を察知していたんだと思います」

会社から彼のマンションまでは、地下鉄でたった二駅。昨日は車だったからわからなかったけど、目玉が飛び出でどこかに転がっていつちやうような家賃の物件だったんだ。

しかも「少し頑張れば、本社から徒歩でも戻れるよ？」なんて言われたりする。もういい、自分を基準に物事を考えていると頭がおかしくなりそうだ。

駅の構内や電車の中では、幸いにも付かず離れずの距離をキープしていてくれた。きつと私の「そばに寄るな」オーラを敏感に感じ取ってくれたんだと思う。本当、あんなところで声をかけないでよ。しかもつ、すつごく馴れ馴れしく……！ どこで誰が見ているかわからないんだから。

「ふうん、君はとても高感度なセンサーを搭載しているんだね。頼もしいじゃないか」

ほらまた、いかにも「見られていることを意識してます」的な笑顔を返してくる。あー、反則っ！ 今度やったら、イエローカードを出そうかしら？ この人、絶対にわかってやっってるよね？

「ここ、夜はコース料理が中心なんだ。勝手に選んでしまったけど、良かったかな。なにか苦手なものはある？」

そういうことは、決める前に確認して欲しいものだ。そう言って突っぱねてやりたいところだったけど、残念なことに私は好き嫌いがまったくない人間だったりする。

「……あ、美味しいかも」

小さく型抜きしたパンをカリカリにトーストして、色とりどりの食材で飾ったオードブル。一見どこにでもありそうだけど、食材の組み合わせが意外で一口ごとに新しい発見がある。次に運ばれてきたのはポテトのポターージュ。優しくて、うっとりするようなお味よ。

そういえば、こんな風にまともな食事をしたのって久しぶり。この数日間、とてもゆっくり休める感じじゃなかったし、身も心も限界値まで疲労していて「食事より睡眠」だったものね。今朝は駅の構内にあるスタンドで、野菜ジュースを一杯飲んだだけ。昼間は仕事に追いつてられながらコンビニのサンドイッチで済ませた。あゝ、温かい料理そのものが懐かしいわ。

「良かった、気に入ってもらえたみたいだね」

そう言って、私を見つめる余裕の微笑み。あるいは「上から目線」とも言えるかな。なによ、偉そうに！ でも、あまりに食事が美味しくて言い返している暇もないの。

「じゃ、そろそろ。本題に入ってもいいかな？ 今日こそは君としっかり話し合わなくてはと思ってね。こういうことは、あまり先延ばしにしない方がいいと思うんだ」

膝に置いたナプキンでそっと口元をぬぐう仕草。本人は意識しているのかどうかわからないけど、

彼の動作って、いちいち育ちの良さみたいなのが表れてるの。悔しいけど、それだけは認めざるを得ない。

もちろん、見た目だってそう。人間はみんな眉の下に眼がふたつ、鼻がひとつに口がひとつ、ってパーツをくつつけているはずでしょう？ それなのに、絶妙なバランスで配置されているそれは「神様選ばれた人」ってことなんだろうな。

吉田和臣 かずおみ 二十八歳。地元有数の進学校から某有名大学に進み、優秀な成績で卒業してカネヲ貿易に入社。本社営業部にてその実力を存分に発揮、今年中にもひとつ飛びに課長に昇格って噂。

……ここまですべてが完璧に整っていると、かえって胡散臭くない？

「先延ばしもなにも、そのお話は最初いきちんとお断りしたはずですよ。だから、これ以上話すことはありませんけど」

そうよ、新しい部屋さえ見つければ、預かってもらってる荷物はすぐに回収できる。どんなにいい条件を提示されたところで、こんな人と同じ空気を吸い続けるなんて絶対に嫌。

ふんと横を向いたところで、タイミング良く運ばれてくるメイン・ディッシュ。ひとつのプレートに肉料理と魚料理が盛り合わせになってる。なんて贅沢！

「つれないなあ。僕は梨実ちゃんに決めているんだから、そんな悲しいこと言わないで欲しいな」  
じーっと見つめられていたら、食事に集中できないじゃない。

「……勝手にそんなこと言われても困るんですけど」

あーやつぱり、はつきりと言わないと駄目なのかな？ 面倒くさいけど、仕方ないか。そう思い

つつ、次のお肉を口の中に放り込む。

「そりゃ、あなたが用意してくれた物件は素晴らしいものだと思います。でも、ちょっと考えたらわかるでしょう？ 私にあんな部屋の家賃が払えると思いますか、絶対無理です。一体おいくらなんて聞く気にもならないけど、もし教えていただいたところで結果は同じです！」

ほらほら、スタートの時点で間違ってるから。それに気づいたら、さっさと諦めて。そう心の中で付け足してみたけど、残念ながら彼には伝わらなかったみたい。

「それがね、あの部屋が一体どれくらいの価値があるのか、実は僕も知らないんだ。そもそも、一度だって家賃を払ったことがないしね。だから、君の財布をおびやかすようなことは一切ないよ」

はああ？ なによそれ、どういうこと？

お肉や魚を次々に口の中に押し込みながらだから、ちよつと緊張感に欠けるけどね。あまりにも馬鹿らしい話だったから、ついつい反応しちゃった。

「実はね、あのマンションは一棟丸ごと僕の父が所有している不動産なんだ。なんでも相続税対策とかでね、現金で持っていると税金でみんな持っていかれるからそういう風にしてるらしい。そうそう、僕の実家は観光旅館をしているんだ。家は兄が継いでるから、僕には直接関係ないけどね。とりあえず、今はあの建物の管理人をしてるって訳。……ま、そんな感じだから家賃のことは心配ご無用なんだ」

彼は「小京都」と呼ばれる地方都市の名前を出した。え、なんなの？。東京のと真ん中にあるマンション一棟すべて所有するだけの資産って、どんだけよ。それにしても、あんな部屋に住んで

いながら家賃がタダって、絶対に信じられない！

「あの部屋だって他に借り手がいれば使ってもらいたいんだけど、なかなかね。さすがに今は不景気だから、経営も難しいよ」

いや、全然困った顔してないし！ というか、恵まれすぎて嫌になるくらいじゃないの。

「そつ、そう言うことなら！ 私じゃなくても、是非にっつて方はたくさんいるでしょう。なんなら会社に大きく張り紙でもしたらどうです？ あつという間に希望者で長い行列ができますよ！」

これって、全然冗談じゃないから。本当にあり得る話よ。

「うーん、今回の話は誰でもいいって訳じゃないんだ」

それなのに、彼はまだ首をひねって唸ってる。どういうパフォーマンスよ？ わざとらしいいったら、ありゃしない。

「誰でも良くなくて、それでなんで私なんですか」

つつけんどんに返したつもりだったのに、彼はまたすごく嬉しそうな顔をする。コイツ、もしかしてマゾ？

「うん、だって今回の相手は僕に興味も関心もない人が最適なんだから。なにしろ、ひとつ屋根の下で暮らすことになるんだしね、変な気を起こされたら困るよ。こっちはその手のことは十分間に合ってるし」

なっ、なんですつてっつ！？ その発言、全世界の女性を敵にまわしてもおかしくないわよ！

「でっ、ででで……でもっ……」

確か、言ってたよね？ この物件は「夫付き」って。それって、……その、そういうことじゃなかったの？ もう、訳わからないっ。

「あ、嫌だな。もしかして、期待してた？」

してないっ、してませんって言うのっ！ そんな風にニヤニヤしないでよ、あんたの方がよほど下心ありそうに見えるわ。

思いっきり威嚇<sup>いかく</sup>してやったのに、全然こたえてないの。しかもっ、さらにとんでもないことを言い出すのよ！

「うーん、でもすぐにも便宜上の結婚をしたいのは本当なんだ。なにしろ、その条件をクリアしないと計画が実行できないんでね」

「えー、ええと、……ですネ」

もう限界、こんな奴のそばになんていられないわ。

だけど、ここで立ち上がったなら、このあとに来るはずのデザートが食べられなくなる。それに、頭も完全にごちゃついてきたし、こころで一度内容を整理する必要があると思ったの。なかなか建設的よね、私。

「要するに、ですネ。吉田さんは今お住まいになっているマンションの管理人をやっていて、その仕事だけで十分生活していけるってことですか？」

「うん、そのとおり」

こつちがすっごく冷めた目で見つめてあげたのに、全然こたえてないのね。余裕の微笑<sup>うなず</sup>みで

れると、マジむかつくんですけどっ！  
「じゃあ、なんで今の会社で仕事しているんですか？ まさか、『ちょっとした趣味で』とか仰<sup>おしや</sup>るんじゃないでしょうね」  
「まあ、あたらずとも遠からず、つてところだね。正直、管理人の仕事は退屈だし、刺激的な毎日

もうっ、いちいち腹が立つ人ね。ちよっとしゃべらせるだけで、この始末。なにもかもわかつているような感じで、上から話すのやめてくれる？  
由緒正しいお家柄、老舗旅館のお坊ちゃんでお金に苦労することには縁がない生活。しかも職場

ではやり手の営業マンで通っていて、女子社員たちからは熱烈なラブ光線を飛ばされまくってる。でもって、そんな自分だから出会って数秒の相手にプロポーズしても即オッケーがもらえるはずだっ？ いえいえ、それは断じてない！ そこまで物事が調子よく進みますかっていうの。

「今回の計画のために君を選んだのはね、お互いにとってメリットがあると思っただけだよ。僕は一日でも早く生活を共にしてくれる妻が欲しい、そして君は当座の間、雨風をしのぐ部屋が欲しい。ほら、お互いの利害関係は一致しているよ。どこもおかしいところなんてないじゃないか」

な……なんぞっ、そう言う話になるのよっ！

「じよっ、冗談じゃないわ！ タダで住まわせてやるから感謝しろって？ 人を馬鹿にするの多い加減にしなさいよっ」

ぜーんぜん、わかってないよな、この人。簡単に「結婚」とか言ってくれちゃうけど、その言葉

にどんなに重みがあるか考えてないみたいだもの。

「馬鹿になんかしてないよ。その証拠に、こんなに丁重におもてなししてるじゃない」

もうっ、どこの世界に食べ物で釣られる女がいますかっ！……って、それは私のことか。やばいわ、勘違い男にさらに間違った印象を植え付けちゃったじゃないの。

「あっ、あのですねー……」

当初の予定では、私たちは話し合いをするためにここに来たらしい。なのに、口を開くたびに話はどうどん横道にそれていくわ、売り言葉に買い言葉で険悪になっていくわで、散々。それでもどうにか態勢を立て直して切り返そうと思ったとき、待望のデザートが運ばれてきた。

「うわっ、すごい！」

おっ、美味しそうっ……！ 焼きたてサクサクのアップルパイだ、しかもアイスクリームが添えられる。餡色の焼き色がたまらないっ、うんうん、今って焼き菓子って気分だったのよね。

——ということ、急に静かになる私。だって、仕方ないじゃない。これは美味しいうちに食べなきゃ損よっ。

「君が腹を立てる理由もわからないではないんだけどね。でも僕の方もせっぱ詰まっているわけだし、とりあえずはこつちの話を聞いて欲しいな」

それって、嘘でしょ。まったくわかってないと思うし、少しもせっぱ詰まってもいないと思うよ？ だって、やたらと楽しそうなんだから。なに、にこにこしているのよ？

「ウチの会社、近々アメリカ支社を新設する話が進んでいるんだ。それでね、僕はその支店長にならないかと内々に打診されている。ほかに数名の候補はいるけど、正直僕の敵じゃないって感じだな」

あ、また鼻で笑ったでしょ？ ふふんっ、とか。なによ、偉そうに。別にあんたの自慢話なんて聞きたくないわ。それにアメリカでもアフリカでもアマゾンでも、どこにでもとつと行けばいいのよっ。そして二度と戻ってこないで。

「それは、素敵なお話ですこと！ でも、そのこととあなたの計画とやらに、なんの関係があるんです？」

「うん、それが大ありなんだ。実は一昨日の話なんだけど、候補者のひとり urgently 急に今回の話に色気を出し始めてね。海外ではパーティなどの席も多い。その支店長なら、妻帯者じゃないと格好が付かないと決めつけるんだ。今はバツイチの総理大臣だっている時代だし、そうこだわる必要もないと僕は思うんだけどね。問題は、彼の話を頭の固い上層部がかなり本気にしているというところだ。そして、当の本人は近々社内結婚が決まってるって訳。酷い話じゃないか」

……いや、それほどでもない。そう思ってしまう私って、かなりひねくれてるかな？ それにしても、いきなり熱弁を奮い始めたわね、この人。

「しかし、僕はあの男にだけは絶対に負けるわけにはいかない。彼はどんなでもない奴だ、その結婚相手は僕の後輩の婚約者だったのに、今回の支店長の話を持ちかけてまんまと自分のものにしてしまったんだからね。しかもその後輩はその後の人事異動で今はインド支社にいる。もちろんそれも、人事課にいるあの男の差し金だ。だから、僕はなんとしても後輩の敵を討つてやらなくちゃならな

い。あんな奴、最初から敵じゃない。僕に足りないのは、唯一『妻』という存在だけだからね」

甘いフィリングを口に運びながら、ちよつとだけ顔を上げると。彼は眉間にしわを寄せて苦しうな表情をしている。自分がどうこうされた訳じゃなくて、酷い目にあつた後輩のために戦うってとか。そうだな、別にこの人は海外赴任とかそういう箔はくをまったく必要としてないもの。

「そう……なんですか」

いやいやいや、これだつて私を騙すための罠かもしれないしっ！　こんな奴の言うこと、簡単に信じちゃ駄目っ。

「でも結婚って簡単な話じゃないですよ？　親だつて親戚だつて関わってくるし、そうなればふたりだけの関係では済まされなくなるでしょう。適当なところで『やっぱり今回の話はなかったことに』なんてできませんよ？」

少なくともウチの親は一筋縄ではいかないわよ？　特にこの吉田さんは次男だつて話。そしたらもう「是非、婿に！」つて言われちゃうわ。そんなことになったら彼だつて困るでしょうし、もちろん私だつて絶対に嫌よ。

「ああ、その点は大丈夫。だつたらあくまでも『ふたりだけの関係』で済ませてしまえばいいんだよ。別に正式に籍を入れる必要はないし、式を挙げることもない。ただ、君が僕の事実上の妻として存在してくれさえすればいいんだ。騙す相手は会社の人間、しかも上層部のごく限られた人たちだけだし、正式に支店長の話が決まつてしまえば、そこでゲーム終了だ」

丁寧にデザート用のナイフとフォークを使う手つき、やっぱりこういうところは「洗練されている」つて言うしかないなあ。

「それに君はもしもの場合の切り札だし。『その話が本当なら本人を連れてこい』とでも言われないう限りは、出番がないと言つてもいい。でもやはりその場になつて慌てるのも嫌だし。それにただの婚約者よりも、事実婚に近い存在の方が一歩リードだと思ふんだよね」

「は……はあ」

なんか、まわりくどいやり方だなあ。確かにそういうシナリオなら、後腐れなく別れられる相手が一番いいわね。

「ようするに、これは『契約結婚』つてことですか？　その相手として、私がこの上なくふさわしい」

まだ、納得できない部分もあるんだけど。なんで自分が巻き込まれなくちゃならないのつて、思うけど。

「うん、だつて梨実ちゃんは僕のことを嫌いでしよう？　絶対に近づきたくないタイプだと思つている。正直、君ほど理想的な相手をほかで探すのは難しいと思ふんだ。だからどう？　しばらくの間、僕に付き合つてくれないかな」

えー、そんなこと言つたつて。いいの、簡単に決めちゃつて。

「……本当に、結果が出るまでの話なんですよね？」

なんだか、真面目に考えるのがだんだん面倒になつてきた。そうじゃなくてもここ数日は色んなことが起こりすぎて、ついていけなくなつてきているのに。

「もちろん、僕と君なら絶対に上手くいくよ」

私の対応が、少しづつ軟化していることに気づいたのだろう。彼は嬉しそうに身を乗り出してくる。うーん、でも本当にこんなでいいのかな。

「……まあ、しばらく様子見ってことでいいのなら」

いいや、荷物も置きっぱなしだし。しばらくお言葉に甘えさせてもらって、その間に新しい部屋を見つければ。この人なら、いきなり襲いかかって来ることもないから安心だしね。

「良かった、それじゃあ『商談成立』ってことで。梨実ちゃん、この先はよろしく頼むよ?」

ビジネスライクに差し出された右手を、ほとんど無意識のうちに握り返していた。

そして、その瞬間からゲーム開始。でも、初っぱなから最終章。ラスト・ダンジョンの洞窟どくぐつに入っている気がしてならないんだけど。

「君の部屋はどう使ってもらおうと自由だ。常識の範囲内であれば、多少のことは目をつぶろう。

もちろん、ボーイフレンドを連れ込んでも構わないよ。あのセキュリティを無事に通り抜けられる人間ならね」

そんなこんなで、マンションに戻って。キッチンカウンターで作戦会議……というか、細々とした取り決めをする。

だって、この家。余計なものがないのはいいんだけど、ふたりが向き合って話し合う場所もないのはどうかしら。あ、その手の女性は直接ベッドにご案内だから必要ない? あえて質問は

しないけど、きつとそんなところかもね。

「バスルームは順番を決めて、つてことでいいですか?」

なにより気になる点はそこだから、真つ先に質問する。ああ、ボーイフレンド云々という辺りはスルーしましょ。いちいち突っ込んでたら、夜が明けちゃうわ。

「うん、もちろん。そして使用中は必ず内側から鍵をかけるつてことで頼むよ。見たくもない姿とかに遭遇したら、災難だし」

それはっ、こっちの台詞だつて言うのっ! ホント、疲れるわ、この人との会話は。

「それから、キッチンも勝手に使って結構。……とは言っても、君の手料理を期待している訳じゃないから、張り切つてもらわなくていいよ。悪いけど、僕の舌はかなり肥えているんだ」

「契約成立のお祝いに」……とかなんとか言つて、話し合いに先駆けて用意されたのが舌を噛みそ  
うな名前のシャンパン。いかにもお値段の張りそうなるラベル、こういうものが冷蔵庫に常備されてるつてどうよ。やつぱり女性と仲良くするための小道具かしら?

「ま、今夜はそんなところでOK? じゃ、そういうことで」

そこでおもむろに差し出される右手。どうでもいいけど、その腕時計も普通じゃないわ。いかにもつて感じよ、別に私に向かつて見せびらかしているわけでもないんでしょうけど。

「……え?」

なに? また握手でもしようつて言うの。いいよー面倒くさいっ、さつきレストランでやったばかりじゃない。それにしても、グーの手のままつてどういうこと? 拳を合わせて挨拶つて、どこ

の国の作法よ。

「ああ、そうじゃなくて」

中途半端に差し出された私の手を見て、彼は大袈裟に首を振る。それから、くすつと小さな声で笑った。

「バスルームの順番を決めるために、じゃんけんしようと思って。別にカードゲームでもなんでもいいけど、それだと梨実ちゃんが負けっぱなしになって可哀想だし。ここは一番手つ取り早く、かつフェアな方法を選ぼう」

最初の対決でチヨキを出して勝利したとき、それはそれは嬉しかったわ。

5

朝の光がレースのカーテン越しにたつぷりと注ぎ込むリビング。

やっぱ、贅沢だよなあ。大都会のご真ん中で、これだけの開放感。窓の外、遠くに見える摩天楼マクドナルドも、心持ち寝ぼけ顔な感じに見える。

「あれ？ おはよう」

コーヒーマシンの香りに満たされたキッチンに、身支度をすっかり終えた吉田氏登場。ああ良かった、私もきちんと着替えてあつて。彼の手には新聞とおぼしきものが三部もある。へえ、普通の新聞の

ほかに経済新聞。そこまでは理解できるけど、もう一部は派手派手な見出しが目にも痛いスポーツ紙じゃない。えー、意外。そんなのも読むんだなあ。

「おはようございます」

今日一番最初の挨拶だから、憎たらしいけどちゃんと目を合わせようと思ったんだよ。なのに、彼の方がまるつきり無視してくれて。その不思議そうな眼差しは、カウンターの上面に向けられている。「なに、これ」

三つ並んでいる椅子の一番向こう側に腰掛ける。それって、私の隣には座りたくないってことかしら。まあ、そうしてくれた方がゆったり使えていいけどね。

「見りゃわかるでしょう、私の朝ご飯です」

そうは言っても、威張るほどのメニューじゃないんだけどね。目玉焼きにレタスとハム、ついでにポテトサラダも添えてみた。お湯で溶いただけのカップスープ付き。プラスしてトーストとコーヒーマシンのコーヒー。

習慣とは恐ろしいもので、いつもどおりの時間にすつきりと目が覚めてしまった。でもここからだと今までの三分の一の時間で職場に着いちゃうし、余裕ありすぎ。元々、私は朝ご飯をしつかり食べるタイプ。どんなに寝ぼけ眼でも、トースト二枚は楽にいける。

「これ、ひとりで全部食べるの？ 僕はまた、朝からお客さんでも来るのかと思ったよ」

今、ものすごく失礼なことを言いましたよね？ でも、気にしないんだから。いちいち相手をしていたら、朝から嫌な気分になっちゃうわ。